



感情状態が自己関連情報の対処に及ぼす影響

著者	田中 知恵, TANAKA Tomoe
雑誌名	明治学院大学心理学紀要 = Meiji Gakuin University bulletin of psychology
巻	24
ページ	37-45
発行年	2014-03-28
その他のタイトル	Effects of affective states on responses to self-relevant information
URL	http://hdl.handle.net/10723/2251

【原著】

感情状態が自己関連情報の対処に及ぼす影響¹⁾

田中知恵（明治学院大学心理学部）

要約

ポジティブな感情が資源として働き、将来の自己改善を可能とする自己制御を促す機能を持つ可能性が指摘されている（Trope & Neter, 1994）。2つの研究を実施し、自己関連情報、すなわち長所ならびに短所情報の処理に及ぼす感情の影響に対して検討した。その結果、研究1ではポジティブ感情状態にある参加者がネガティブ感情状態にある参加者よりも、自己の成長のために自己関連情報に対処しようとする効果が示された。研究2では、ポジティブ感情状態にある参加者の方がネガティブ感情状態にある参加者よりも、自己の短所情報に対して対処しようとする効果が示された。また感情状態ならびに情報のヴェイレンスに関わらず、成長の信念が強い群が弱い群よりも自己関連情報に対処しようとする効果が示された。ポジティブな感情状態が自己の否定的側面への対処を通じ、自己改善のための自己制御を促す可能性に関して考察した。

キーワード：感情状態、自己関連情報、成長の信念

問題

感情と社会的情報処理

近年の社会心理学、特に社会的認知研究の領域においては、情報処理過程に影響を与える要因として感情の役割に対する注目が高まっている。なかでも、情報処理の対象とは無関連な源泉から生じた感情（無関連感情）の影響については、主に説得メッセージのような社会的情報（e.g., Petty, Fabrigar, & Wegener, 2003）や他者に関する情報（e.g., DeSteno, Dasgupta, Bartlett, & Cajdric, 2004）を題材として実証的な研究が進められてきた。これらの研究では、実験操作により参加者にポジティブもしくはネガティブな感情、特に比較的弱い感情状態であるムードを導出し、続けて別の課題として処理対象を呈示している。そしてその対象の処理スタイルに対して測定することにより、感情のヴェイレンスと情報処理に関して検討してきた。これまでの研究では、ネガティブな感情状

態にある場合には、ポジティブな感情状態にある場合よりも対象が精緻に処理されることがしばしば示されており、その結果の多くは感情の機能主義的な観点から説明されてきた。たとえば感情シグナル説（Schwarz, 1990）では、ポジティブ感情は状況が安全であることのシグナルとして働き、大まかな処理を導くと仮定している。他方、ネガティブな感情状態は状況に問題があることのシグナルとして働くため、分析的な処理を導くと仮定している。この仮説によると、実験操作によって感情を導出された受け手は、自分の感情の原因を状況によるものと誤って解釈する。それゆえネガティブ感情を導出された場合は、状況が問題をはらんでいるための感情であると取り違え、ポジティブ感情が導出された場合よりも呈示された対象情報に対して精緻な処理をするという。

感情と自己関連情報処理

説得メッセージや他者に関連する情報を呈示

した場合には、上記の仮説により解釈可能な結果が見られるものの、同じ情報でも自己に関連する情報を呈示して検討した場合には、こうした誤帰属のプロセスでは説明できない研究結果が示されている。たとえば自己関連情報を呈示した研究 (Raghunathan & Trope, 2002) では、実験参加者にポジティブもしくはネガティブな感情状態を導出した後、別課題として自己関連情報を呈示した。その精緻化の程度を自己関連情報に対する記憶指標により測定したところ、情報の否定的な側面に対しては、ポジティブ感情条件の方がネガティブ感情条件よりもよく記憶していた。また、パーソナリティ・テストの結果として長所と短所を同時に実験参加者に呈示し、どちらの情報に対してより注目するか検討した研究においても、ポジティブ感情条件はネガティブ感情条件よりも短所情報に注目していた (田中, 2007)。

これらの結果は、状況のシグナル以外のポジティブ感情の機能を示唆している。すなわち、将来の自己改善を可能とする自己制御を促す働きである。本研究ではこの点に注目し、感情の機能の別側面について実証的に検討する。

なおシグナルとしての感情の機能以外にも、感情改善を促す感情の働きに関しても研究が行われている。これまでの研究では、ネガティブ感情状態にある場合の感情制御、すなわち感情改善の働きに関して研究知見が多く提示され、ポジティブ感情状態にある場合の感情制御、すなわち感情維持に関する知見は少ない。ネガティブな感情が生じると、そうした感情を改善することが重要な目標となるため、人はそうした感情の原因をつきとめようと状況を注意深く分析したり、感情を改善させるような刺激に注意を向けたり、活動に従事したりするのである。他方、ポジティブな感情が生じている場合には、より重要な目標があればそれを遂行することが可能であるのかもしれない。そしてその重要目標を遂行することによって、一時的にポジティブ感情が低減するという短期コストを超えて、より高次元目標に対する自己制御が志向

されるのだろう。このことを Trope らはポジティブ感情が目標遂行における資源として働くと説明した (Trope & Neter, 1994; Trope, Igou, & Burke, 2006)。

Gervey, Igou, & Trope (2005) では、こうした可能性を示唆する研究知見が見出されている。この研究では、ポジティブもしくはニュートラルな情状態を実験参加者に導出した後、長所と短所に関する偽フィードバック情報を呈示した。続いて学習動機目標 (自分を向上させるために自己認識すること) もしくは感情動機目標 (気分を良くすること) を教示によって操作し、長所と短所の情報に対する興味度を測定した。その結果、いずれの感情状態にある場合でも、参加者は学習動機が活性化している場合には短所のフィードバックに興味深いと回答し、感情動機が活性化している場合には長所のフィードバックに興味深いと回答した。さらに重要なこととして、これらの効果はポジティブ感情条件においてより強く認められた。この結果は、ポジティブ感情がその時に重要な目標遂行を促進させる可能性を示すものと解釈される。

しかしながら、Gervey et al (2005) の研究ではネガティブ感情状態にある場合に関しては検討されておらず、見出された効果がポジティブ感情の影響によるものか、あるいはニュートラルな状態と比較して何らかの感情が導出されたために生じたものか区別することができない。よって本研究では、ポジティブ感情とネガティブ感情を研究参加者に導出し、先の解釈可能性について検討する。

本研究の目的

本研究では、上記の点に関して検討するため研究を2つ実施する。自己関連情報として長所と短所を取り上げ、感情状態によってそれぞれの情報内容に対する対処の程度が異なるのか検討する。対処の程度とは、たとえば自己の短所情報をフィードバックされた場合に、その否定

的な側面を改善するために情報の受け手が努力しようとする程度を指す。本研究では、情報内容の記憶や情報への注目の程度ではなく、自己に関連する情報内容に対して参加者がどう対処しようとするのか直接的に測定する。もしポジティブ感情が自己の成長に対する自己制御を促すのであれば、ポジティブな感情状態にある場合の方が、ネガティブな感情状態にある場合よりも自己の否定的側面を改善するためその内容に対処しようとするだろう。

また研究では上記の効果の調整要因として、成長の信念の影響に関して検討する。たとえば、自己の成長に対する信念が強い人は、自己改善のため自分の短所に関わる情報に注目し、その内容に対処しようとすると考えられる。他方、自己の良い側面をさらに伸ばそうとして自分の長所に関わる情報に注目し、その内容に対処しようとする可能性もある²⁾。こうした成長の信念の程度によって、上記で述べた感情状態による効果が調整される可能性があるため、研究2では情報への対処の指標とあわせて成長の信念に関わる測度にも回答を求め、分析に用いることとする。

なおこれまでの多くの研究では、情報に対する記憶指標を測定し、感情状態による差について検討してきた。確かに、自己のある側面に対する注目や注意の仕方によって後に再生される情報の内容や程度にも差が生じると考えられ、記憶指標はそうした精緻化の程度をとらえる測度として妥当と考えられる。しかしながら、再生の程度が高かった情報が必ずしも参加者によって興味深く、自己の成長のために重要な内容ととらえられたために精緻化されたのかどうかは明らかではなく、解釈には注意が必要であった。たとえば、ポジティブな感情状態にある場合に自己の短所情報に対する記憶の程度が高かったとしても、呈示された情報が受け手にとってその時の感情とは不一致な否定的内容であるため、情報に注意が向けられてそうした効果が生じた可能性もある。よって、本研究では記憶指標ではなく、参加者がどのように自己に

関する情報に対処しようとしているのか、その程度を直接的に参加者にたずねることによって測定し検討する。

研究 1

研究1では以下の予測に関して検討する。自然生起した感情状態において、ポジティブ感情状態にある場合にはネガティブ感情状態にある場合よりも、短所情報に対処することにより自己改善しようとするだろう。

方法

調査対象者

都内私立大学の学生 101 名 (男性 43 名 女性 58 名)。平均年齢は 21.39 歳、標準偏差は 1.11 であった。

手続き

“青年期の意識や行動に関する調査”の名目で調査への参加を依頼した。年齢や性別などをたずねるフェースシートへの回答を求めた後、現在の感情状態について、“楽しい”“悲しい”など 12 項目に対し、“全くそう思わない (1) - 非常にそう思う (7)”の 7 件法でたずねた。続いて親しい人から“わるいところ (短所)”もしくは“よいところ (長所)”を言われたとき、“わるいところを改めるために努力しようと思う”など短所情報 7 項目、“よいところを言ってくれるのは自分にとってためになる”など長所情報 5 項目について“全くそう思わない (1) - 非常にそう思う (7)”の 7 件法でたずねた。

結果

感情状態の群分け

感情状態についてたずねた 12 項目のうち、ネガティブ感情の程度についてたずねた項目の得点を逆転した後、各項目得点を合計し感情得点 ($\alpha = .91$) を算出した。感情得点の理論的範囲は 12 点 ~ 84 点であった。得点が高いほど感

情状態が肯定的に評定されたことを示し、他方、得点が低いほど感情状態が否定的に評定されたことを示す。この感情得点の中位点（48）を用いて参加者をポジティブ感情群（ $n=50$ ）とネガティブ感情群（ $n=51$ ）に分割した。

短所情報ならびに長所情報への対処得点

短所情報 7 項目の合計得点（ $\alpha=.78$ ）を算出し、短所情報への対処得点を作成した。この得点に対し感情条件の t 検定を行ったところ、ポジティブ感情群（ $M=32.62$, $SD=6.68$ ）はネガティブ感情群（ $M=33.74$, $SD=5.18$ ）よりも得点が高かった（ $t(98)=2.41$, $p<.05$ ）。

長所情報 5 項目の合計得点（ $\alpha=.71$ ）である長所情報への対処得点に対しても同様の分析を行ったところ、ポジティブ感情群（ $M=27.89$, $SD=3.77$ ）の方がネガティブ感情群（ $M=25.98$, $SD=4.22$ ）よりも得点が高かった（ $t(96)=2.36$, $p<.05$ ）。

考察

ポジティブな感情状態にある場合に、人が自己の成長のために自己関連情報に対処しようとするのが示唆された。この結果は、人がその時の感情状態と同じヴェイレンスの対象に注意を向けようとする感情一致のプロセスでは説明できない。もしも感情一致のプロセスが生じていたとすれば、ポジティブ感情状態の際には長所情報に対してのみ対処得点が高くなると考えられるが、実際には短所情報に対する対処得点も高かった。また、ポジティブ感情状態にある場合に短所情報に対する対処得点が高かったことは感情不一致のプロセスによって解釈可能であっても、長所情報に対する対処得点も高かったことはそのプロセスでは説明できない。研究 2 では、研究 1 を追試し同様の結果が認められるのか検討する。

研究 2

研究 2 では研究 1 を追試し、さらに感情状態

の効果が成長の信念によって調整されるのかに関してもあわせて検討する。研究 2 の予測は以下の通りである。ポジティブ感情状態にある場合にはネガティブ感情状態にある場合よりも、短所情報に対処することにより自己改善しようとするだろう。この効果は成長の信念が強い場合の方が大きいだろう。

方法

調査対象者

都内私立大学の学生 153 名（男性 33 名 女性 120 名）。なお、本論文で報告する分析にはすべての項目に回答した 150 名のデータを用いた（男性 32 名 女性 118 名）。平均年齢は 21.22 歳、標準偏差は 0.68 であった。

手続き

“青年期の意識や行動に関する調査” の名目で調査への参加を依頼した。年齢や性別などをたずねるフェースシートへの回答を求めた後、大学に入学してから現在までの間で、“悲しかったり辛かったりしたこと”（ネガティブ感情条件）、あるいは“嬉しかったり楽しかったりしたこと”（ポジティブ感情条件）に対して想起させ、内容と感情について記述させた。その後、研究 1 と同様の項目により感情状態と自己関連情報への対処に関して回答を求めた。最後に参加者が成長に対して持つ信念について測定するため、“努力すれば人は変われると思う” “自分を変えるために何かに取り組める” など 5 項目に対し “全くそう思わない (1) - 非常にそう思う (7)” の 7 件法でたずねた。

結果

成長に対する信念の群分け

成長に対する信念についてたずねた 7 項目の得点を合計し信念得点（ $\alpha=.74$ ）を算出した。信念得点を取りうる理論的範囲は 7 点～ 35 点であった。この信念得点の中位点（20）を用いて参加者を信念低群（ $n=79$ ）と信念高群（ n

=71) に分割した。

感情状態の群分け

感情状態についてたずねた 12 項目のうち、ネガティブ感情の程度についてたずねた項目の得点を逆転した後、各項目得点を合計し感情得点 ($\alpha=.91$) を算出した。感情得点の取りうる理論的範囲は 7 点～84 点であった。この得点に対する感情条件の差が有意でなかったため ($t(150)=1.35, ns$)、感情得点の中位点 (48) を用いてポジティブ感情群 ($n=75$) とネガティブ感情群 ($n=75$) に分割した³⁾。

短所情報ならびに長所情報への対処得点

短所情報 7 項目の合計得点 ($\alpha=80$) を算出し、短所情報への対処得点を作成した。この得点に対する感情×信念の分散分析の結果、感情の主効果が有意に認められた ($F(1,146)=4.70, p<.05$)。ポジティブ感情群 ($M=36.40, SD=5.64$) はネガティブ感情群 ($M=34.23, SD=6.72$) よりも得点が高かった。また信念の主効果も有意に認められた ($F(1,146)=12.72, p<.001$)。信念高群 ($M=37.17, SD=6.44$) は信念低群 ($M=33.65, SD=5.67$) よりも得点が高かった。交互作用効果は有意ではなかった ($F(1,146)<1, ns$)。各群の平均値を Figure 1 に示す。

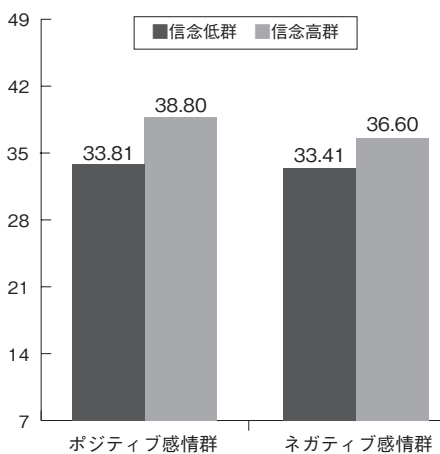


Figure 1 短所情報への対処得点

長所情報 5 項目の合計得点 ($\alpha=.84$) である長所情報への対処得点に対しても同様の分析を実施したところ、信念の主効果のみが有意に認められた ($F(1,146)=24.78, p<.001$)。信念高群 ($M=29.11, SD=3.69$) は信念低群 ($M=25.47, SD=5.09$) よりも得点が高かった。感情の主効果 ($F(1,146)=1.83, ns$)、ならびに交互作用効果は有意ではなかった ($F(1,146)=1.27, ns$)。各群の平均値を Figure 2 に示す。

考察

研究 2 の結果より、ポジティブな感情状態にある場合、人は自己の否定的な側面である短所情報に対して対処しようとする事が示唆された。ただし研究 1 の結果とは異なり、こうした効果はネガティブ感情状態にある場合には認められなかった。また新たに検討した成長の信念の影響に関しては、感情状態のヴェイレンスや自己の側面の肯定否定に関わらず、成長の信念が強い場合の方がより自己関連情報に対処しようとする事が示された。

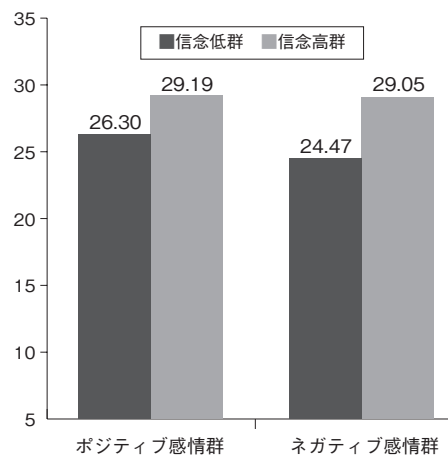


Figure 2 長所情報への対処得点

総合考察

2つの研究を通して、ポジティブな感情が自己の否定的側面への対処を通じ、自己改善のための自己制御を促す機能を持つ可能性が示唆された。この結果は、人が自分の感情状態と一致するヴェイレンスの情報に注意を向けるという感情一致のプロセスでは説明できないものである。また研究1ではポジティブ感情状態にある場合に、ネガティブ感情状態にある場合よりも自己の肯定的側面である長所情報に対して人も人が対処する可能性が示された。

なお本研究では、こうした領域で多く扱われてきた情報に対する記憶指標を従属変数とはせず、自己に関連する情報にどう対処しようとするのか、その程度に関して直接的に測定した。これまでの研究では記憶指標を扱うことにより、たとえポジティブな感情状態にある場合に否定的な情報の再生程度が高かったとしても、その結果が感情状態と不一致なヴェイレンスの情報に注意を向けたことによって生じた可能性を否定することはできなかった。しかしながら本研究では情報への対処について検討したことで、想定されるプロセス、すなわちポジティブ感情による自己改善のための自己制御がより明確に示されたと考えられる。

研究2では、こうしたプロセスの調整要因として人が自己の成長に対しても持つ信念の効果に関して検討を試みた。ポジティブな感情状態にある場合、否定的側面への対処に対して予測していた感情状態との交互作用効果は認められなかったものの、成長の信念が強い場合に自己関連情報に対処しようとする自己制御が高まること示された。この結果は、本研究で測定された変数が単にポジティブあるいはネガティブのヴェイレンスを持つ情報への注目であったのではなく、自己改善のために自己の否定的側面に関する情報を受容し、その内容に対処しようとする志向性を測定したものであったことを傍証するといえよう。

今後の課題としては以下の点が挙げられる。

第一に、感情導出の操作方法に関して検討し、研究を追試して効果の頑健性を確認する必要性である。研究2では参加者に自伝的記憶を想起させることによりポジティブ感情もしくはネガティブ感情の導出を試みた。しかしながら、その操作の妥当性は確認されず、回答された感情測度の得点を用いて参加者を群分けして分析を実施した。記憶の想起による感情状態の導出は、さまざまな研究で感情操作の方法として採用されているものの（e.g., Bless, Bohner, Schwarz, & Strack, 1990; Petty, Schumann, Richman, & Strathman, 1993, Gervy et al., 2005）、本研究のように集団状況で実施する場合には注意が必要であろう。

また、本研究では“大学に入学してから現在までの間”の出来事に対して想起させた。しかしながら、研究2では回答されたデータを分析に用いた150名の参加者のうち、大学3年生が117名、大学4年生が33名と3年生以上の学生がほとんどであった。よって、大学入学時のエピソードについて想起した場合にはすでにその状況が変化していた可能性がある。またネガティブな出来事を想起したとしても、そうした状況乗り越えたこともあわせて想起され、想定されていたような感情状態が導出されなかった可能性もあろう。たとえば、参加者の所属する大学では多くの学部において1, 2年次と3, 4年次では別校舎で授業が実施されるが、ネガティブ感情条件に割り振られた大学3年生の回答には、(1, 2年次に授業が実施される校舎の) “1限に向かうことが辛かった (片道2時間)” 旨の記述もあった。もちろん当時を想起することによりネガティブ感情が導出される可能性もあるものの、すでに別の校舎に通っており、現在の状況が改善していることでむしろ安堵感といったポジティブ感情も生じた可能性もある。よって、感情操作として記憶想起の方法を用いる場合には、現在からそう遠くない過去からの出来事に限定した上で、記憶想起するよう教示した方が良いと考えられる⁴⁾。

なお、自伝的記憶の想起という方法によって

感情状態とともに自己効力感や自尊心も操作されてしまう可能性もあるだろう。たとえばポジティブ感情条件で自分が学力テストで良い成績を取めたことや重要他者から認められた経験を想起した場合、自己効力感や自尊心の程度が高まり、自己の否定的側面を受容する緩衝として働いたかもしれない。今後はこの可能性を否定するため、自己効力感や自尊心に影響を与えないよう、映像視聴や音楽聴取などの方法でも感情状態を導出し、本研究の結果が再現されるのか検討する必要がある。本研究では、研究1では自然生起した感情状態の評定を感情得点として用い、研究2では感情導出後の評定を感情得点として用いた。いずれの場合もポジティブ感情状態にある場合に否定的な自己の側面に対する対処得点が高かったことは、感情生起の状況が異なる場合でも同様の働きが認められたことを示唆するものである。

第二に、測定方法ならびに測定項目の内容について検討する必要があるだろう。本研究では、“わるいところ（短所）”もしくは“よいところ（長所）”を親しい人から言われたときどのように思うか、短所に関して7項目、長所に関して5項目、合計12項目でたずねた。両側面に回答された得点間には、研究1、研究2とも中程度の相関が認められた（順に、 $r=.40$, $p<.001$, $r=.34$, $p<.001$ ）。研究では感情状態のヴェイレンスによっていずれかの側面に関する情報への対処の程度が異なるのか検討するため、このように両側面を分けてたずねることによりその差異をとらえようと考えた。しかしながら、いずれの情報も自己の成長のためには重要な内容であり、十分に感情による違いをとらえきれなかった可能性がある。今後はより具体的に“わるいところと良いところのどちらを聞きたいか”などの項目を加えることで、想定するプロセスに関して明確に検討する必要があるだろう。また、項目の内容に関しても精査する必要もあるだろう。

なお、研究2では成長の信念の効果に関して5項目への回答を求めて検討した。他者との関

係性における自己の可変性に関する測度に関しては検討されているものの（佐久間・無藤, 2003）、本研究で扱った経験や努力による自己の変化可能性、つまり成長の信念の程度を直接的に測定する項目内容に関しても今後精査した上で、感情の影響を調整要因としての役割を再度検討する必要がある。

こうした今後の検討課題はあるものの、本研究により明らかになったこと、すなわちポジティブな感情状態にある場合、人が自己の否定的側面に関する情報に対処する傾向があるという点、またそのプロセスが自己の成長のための自己制御としての働きを示唆するという点は、感情の機能を示した知見といえよう。

感情はしばしば人の行動や意思決定に不合理な影響をもたらすものとしてとらえられてきた。しかしながら本研究で示された自己制御を導くポジティブ感情の働きは、感情の適応的側面を示唆するものである。さらに実証的な検討を進め、こうした働きのメカニズムを明らかにする必要がある。

引用文献

- Bless, H., Bohner, G., Schwarz, N., & Strack, F. (1990). Mood and persuasion: A cognitive response analysis. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 16, 331-345.
- DeSteno, D., Dasgupta, N., Bartlett, M. Y., & Cajdric, A. (2004). Prejudice from thin air: The effect of emotion on automatic intergroup attitudes. *Psychological Science*, 15, 319-324.
- Gervey, B., Igou, E. R., & Trope, Y. (2005). Positive mood and future-oriented self-evaluation. *Motivation and Emotion*, 29, 269-296.
- Petty, R. E., Fabrigar, L. R., & Wegener, D.T. (2003). Emotional factors in attitudes and persuasion. In R. J. Davidson, K. R. Scher-

- er, & H. H. Goldsmith (Eds.), *Handbook of affective sciences*. New York: Oxford University Press, Pp. 752-772.
- Petty, R. E., Schumann, D. W., Richman, S. A., & Strathman, A., J. (1993). Positive mood and persuasion: Different roles for affect under high-low-elaboration conditions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64, 5-20.
- Ragunathan, R., & Trope, Y. (2002). Walking the tightrope between feeling good and being accurate: Mood as a resource in processing persuasive messages. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 510-525.
- 佐久間路子・無藤 隆 (2003). 大学生における関係的自己の可変性と自尊感情との関連教育心理学研究, 51, 33-42.
- Schwarz, N. (1990). Feeling as information: Informational and motivational functions of affective states. In E. T. Higgins & R. M. Sorrentino (Eds.), *Handbook of motivation and cognition: Foundations of social behavior*. Vol2. New York: Guilford Press. Pp. 527-561.
- 田中知恵 (2007). 感情状態が自己関連情報の処理に及ぼす影響 日本社会心理学会第48回大会発表論文集, 316-317.
- Trope, Y., Igou, E. R., Burke, C. T. (2006). Mood as a resource in structuring goal pursuit. In J. P. Forgas (Ed.), *Affect in social thinking and behavior*. New York: Psychology Press. Pp. 217-234.
- Trope, Y., & Neter, E. (1994). Reconciling competing motives in self-evaluation: The role of self-control in feedback seeking. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66, 646-657.

脚注

- 1) 本研究はJSPS科研費22530677の助成を受けたものです。本研究の一部は日本社会心理学会第47回大会にて発表された。
- 2) 成長の信念に関しては、原島雅之先生（愛国学院大学人間文化学部専任講師）よりご示唆を頂きました。記して感謝申し上げます。
- 3) 感情状態の操作の妥当性が確認されなかったものの、各対処得点に対する操作された感情×信念の分散分析を実施した。その結果、短所情報に対する対処得点、長所情報に対する対処得点のいずれにおいても信念の主効果のみが有意に認められた（順に、 $F(1,148) = 14.04, p < .001, F(1,147) = 25.89, p < .001$ ）。
- 4) 感情導出の操作時に用いた教示に対するこのご指摘は、沼崎誠先生（首都大学東京人文科学研究科教授）より頂きました。記して感謝申し上げます。

Effects of affective states on responses to self-relevant information¹⁾

Tomoe TANAKA
(Faculty of Psychology, Meiji Gakuin University)

Abstract

It has been suggested that positive affect serves as a resource that would facilitate self-regulation for future improvements. Two studies investigated the influence of the affective states on the processing of self-relevant information, such as feedback about weaknesses and strengths. Study 1 indicated that participants in the positive affective condition increased responses to feedback about self-relevant information for their future growth than those in the negative affective condition. Study 2 indicated that participants in the positive affective condition increased responses to feedback about their weaknesses than those in the negative affective condition. Beliefs about growth increased responses to feedback about self-relevant information, regardless of the valence of affective states and the contents of the information. The possibility that positive affect promotes the pursuit of self-regulation for future growth through responses to one's own weaknesses are discussed.

Key words : affective states, self-relevant information, belief of growth